あくた

作　サカイリユリカ

登場人物

男1
女
男2
友人

舞台奥、ベッドに気だるげに横たわる男女。
男1は寝そべったままコンドームを手に持ってぶらぶらさせている。
女、ぼんやりとそれを眺めている・・
男1、ベッドから起き上がるとコンドームの口を器用に縛りゴミ箱へ捨てようとする。
女、現実に引き戻されたかのように起き上がる。

女　あ、
男1　ん？
女　あ、いや、
男1　なに、
女　なんか、もったいないな――って、
男1　（ゴムを女の前に差し出し）じゃあ飲む？
女　・・それは、
男1　ウーソ

男1、女の頭を軽くぽんぽん叩くとゴミ箱にコンドームを捨てる。

女　・・・もういっかい
男1　え？

女　なんでも
男1　シャワーあびてくれば

男1、ベッドの中にもぐりこむ。

女　うん

女、ハケる。
男1、ベッドから起き上がり身支度を整え始める。
・・と、唐突にゴミ箱から先ほどのコンドームを取り出し見つめる。

男1　何やってんだか

男1、ゴミ箱にそれを放り投げると、ベッドのシーツに手を擦りつける。

男1、部屋を振りかえることもなくでていく。
徐々に夜に向かって、暗く沈んでいく空間。
既に身支度を整えた女、歩いてくる。

ビニール袋からゆっくりと傘を引き抜く。
女、袋の底にたまった水をみようとするが、興味がうせたようにビニールの口を縛る。
傘を少し左右に振って水滴を落とし、傘をさす。
片手に袋を持ってぶらぶら無意識に揺らしながら、歩いていく。

女　ゴミ箱ないかなぁ

女、電話をかけ始める。

女　あ、もしも・・

声　おかけになった電話番号は、現在使われておりません

女　・・・・ですよね

声　おかけになった電

女、ボタンを押して携帯を切る。
静かに歩きだす。

薄暗い空間が少しずつ照らし出される。
部屋の輪郭がはっきりしてくる。
テーブルに用意された1人分の食事。
あたためられたばかりなのか、湯気が立っている。
手をつけようとしない女。

男2　食わないのか
女　うん
男2　まだなんだろう
女　うん　でもいいよ食べて
男2　いや　俺はもう

女　そうだよね　ごめん

男２　少しもいらない

女　（箸を手に取るものの、もてあましている）

男２、立ち上がって棚からラップを持ってくる。料理にラップをかけようとする。

女　なにするの

男２　いたんじゃうと思わない？

女　え

男２　だからさ、

女　ああ

男２　いたむでしょ、まずくない

女　ああ、まずくなるとは思うけど・・

男２　ほら、（ラップをかけようとする）

女　待って

男２　（気にせずラップをかける）

女　だから待って

男２　食べないんだろ

女　待ってって言ったでしょ

男２　・・・

男、立ち止まる。

女　ごめん　もう少ししたら食べるから

男２皿をテーブルに置きなおす。

男２　今食べたら

女　今じゃなくてもいいかな

間。

男２　あぁ、猫舌だったっけ
女　え
男２　今度から気をつけるよ
女　いや、別に私は
男２　（さえぎるように）おやすみ
女　あ
男２　おやすみ
男２去る。
女、しばらく呆然と座り込んでいる。
友人がやってくる。隣り合って座っている。
友人　ないの、なんかほら、積もる話っていうか
女　なにそれ、
友人　あるでしょ山ほど
女　そりゃそうだけど　どっから話したらいいのか
友人　やだなあ、何でも話してよ
女　うん、
友人　最近はどう
女　まあ、ぼちぼち
友人　そっか、元気そうで良かった　なんか、忙しいのかなって
女　あーそれほどでも
友人　そ　良かった
女　ありがとう　そっちも　なんかほんと、昔と変わらないね
友人　そう？
うん、よく言われる
女　だろうね　だって変わってないもん　ほんとに

友人　そんなに？いやそっちだって
女　うそ
友人　正直　最初は誰かと思ったけど

女　え？
友人　なんてね　だってほら、かなり久しぶりだったし
でも連絡とってみて良かった　ありがとね
女　なに急に　気持ち悪いなあ

友人　だってほら、またここにこれるなんて思ってなかったし
女　そうだね　ここも・・まだ残ってるなんてね
友人　まあここはね
女　え
友人　最近ここによくくるんだ　あ、みて
女　え
友人　川　なんか水がずいぶん
女　え、あぁ・・最近、雨ふったっけ

友人　いや、たぶんあれだ、上流で雨がさ、
女　あぁ、
友人　しかしすごい色してるね
女　うん　どうりでくさいわけだ

友人　え
女　だって、そう思わない
友人　ああ・・もう慣れちゃったかな
女　え
友人　それに今日はそこまでひどくないよ
女　ああ・・そうなんだ
友人　そうそう　それに昔から綺麗なわけでもなかったしねここは
女　そうだったね

友人、その場にあおむけで寝そべる。

友人　あ、
女　どうしたの

友人　いや、なんか、いいにおいしたなって、今
女　え・・あぁ、ああ
なんだっけ、これ　この、確か前にも

友人　キンモクセイ
女　あぁ・・そうそうそれ
友人　好きだなあこれ
女　近くに在るのかな

友人　そうかもね

友人、笑う。

女　え、なにどうしたの
友人　いやちょっと思い出してさ、

女　え？
友人　覚えてない、ほら、キンモクセイはトイレの香り、って
女　トイレって

友人　ほら、あれ・・いつだったかな　話したことあったじゃない
このにおい、なんだっけって・・一生懸命思い出してさぁ。で、
「あ、トイレだ！」って、トイレの芳香剤だ、って2人で爆笑したよなあって

女　あったっけ、そんなこと

友人、まだ笑っている。

友人　あったでしょ、いや、あれはおかしかったよねぇ

女　芳香剤なの
友人　え

女　いやだから
友人　ああ、昔はね　今は少ないんじゃないかな
ほら、キンモクセイってにおい強いから　ああいう、トイレの匂いとかに

よくきくんだよきっと

女　ああ、なるほど

友人　（笑って）忘れちゃったのかあ

女　それだって何年前の

友人　まあ、もう１０年以上たってるか　むしろ覚えてる方が不思議だよね

女　記憶力良かったっけ

友人　悪いよ　でも最近思い出すんだよね　ふとしたときにさ、
ほんとたわいのないことなんだけど思い出すの

女　そういうもんかな

友人　うん、だからあんたも憶えてはいると思うけど

女　そうだといいけどね

間。

友人　ちょっと・・寒くなってこない

女　ああ、そういえば

友人　いきますか、そろそろ　夜、予定あるんでしょ

女　そっちだって子供が

友人　まあ、まあ

女　早く行ってあげないと

友人　大丈夫だって　みてもらってるし

女　なに言ってんの、ほらお母さん

友人　はあい

歩き出す２人。

友人　じゃ、またね

友人、ハケる。

女　うん、また・・・

間。

女　また、ねぇ・・・。

スクリーンに映し出される、足相撲する男女のシルエット。

女　はじめまして

“６月１４日午後１３時／２００７年春／３時間４０分８秒／東京都新宿区／オトナ２名／６３００円／“

チェッカーの音が重なる。

女　いきますか

ゆっくりと足と足が絡み合い、指先と指先がつかず離れずの状態を繰り返していたり、足先で互いの存在を感じ、遊んでいるかのよう。
やがて足の指同士がぎゅっと固く結ばれる。

女　さようなら

やがて、ゆっくりと指先は糸を引くようにつーっと離れていく。

男2がやってくる。

男2　ただいま
女　ああ、帰ってきてたの
男2　うん
女　いつ　さっき？
男2　割と

女　そ、

男2、去ろうとする。

女　あ、待って

男2　なに
女　あのさ、これどうしたの
男2　え
女　なんでこんなことになってるの

女、冷蔵庫の野菜室の透明なフタを静かにあける。
あたりに漂う異臭。

男2　ああ、それのことか
女　くさい

男2　ごめんって、
女　信じらんない
男2　あー・・

女　なんでほっといたの、こんなになるまで
男2　ほうっておいたわけじゃない
女　生ものは　早いとこ食べなきゃ
男2　食べようとは思ってたよ　今日か明日
腐る直前が一番おいしいらしい
女　もう手遅れだけどね

男２　あぁ・・もったいないなあ

女　・・じゃあ、食べれば？

男２　え

女　ウソだよ（静かに溜め息を吐く）
ほっとくと水みたいになってひどいことになるから　冷蔵庫じゅう水びだし

女、舞台奥へ。

男２　（冷蔵庫をのぞきこみ）あーなんにもないな

ガサガサ音をたてて、透明なビニール袋に乱雑に詰め込まれる腐った果物。
汁が袋の底にたまっていく。
男２、ビニール袋を縛ってゴミ箱へと放る。
男１が現れる。

男１　誰だか分かる

女　誰だっけ

男１　忘れちゃった

女　誰

男１　おかしいなあ、先週の話なのに

男１、いつの間にか女と背中合わせで座っている。

男１　今　近くにいる、たまたま来てるんだけど

女　そっか

男１　そういえば家近かったかなと思って

女　ああ

男１　いま家？

女　え

男１　ちょっと会えたりとか

女　いま？

男１　それか明日

女　じゃあ明日

男１　わかった

男１、去る。

女、戻ってきて服とハサミをもち、床で服を広げて切り裂き始める。

男２　なにやってんだよ

女　見りゃわかるでしょ

男２　いや、それお前のだろ

女　そう、でももういらないし

男２　え

女　雑巾にするの　そこふくから

男２　なんで

女　汚いでしょう

男２　そうじゃない　どうしてわざわざそれをさ、
ほかにあるだろう雑巾なんて　なんなら今買ってきてもいい

女　いいよ　新しいのなんて
これどうせいらないやつなんだし

男２　嫌がらせか

女　なにが

男２　いや、いい　もう寝るから

女　結構気に入ってたんだけどね、これ

女、ためらいなく服にハサミを入れる。

みるみるうちに服はただの布切れへと変貌を遂げる。

女、ゴミ箱のふたをもう一度開けようとする。
友人がやってくる。

友人　みつかった
女　ほんとにここでいいのかな

友人　うん、だってあっちの大きな木から東に十歩、南に二歩だもの　ここでしょう
女　逆じゃなかった
友人　どういうこと
女　南に二歩で　東に十歩
友人　そうだったっけ
女　今となってはもうわからないけれど
友人　花咲かなかったのかな
女　なに花って
友人　いや、いれたんだよ私　確か種を
女　ああ・・でも缶の中でしょう
友人　咲くかもしれないじゃない　もしかしたら
ねえ、なにいれたの
女　ひみつ
友人　けち　覚えてないんでしょどうせ
女　覚えてるよ
友人　はいはい
女　あのさ、もうそろそろもう最後にしない
友人　つかれちゃったの
女　時間がいくらあってもたりないよ　このままじゃ
友人　いくらでもあるけどね　時間は

まああんたがそういうなら

女　・・緊張してきた

友人　ついに感動のご対面でーす

友人、ふたをあける。２人で覗き込む。

女　ああ

友人　（笑い出す）

女　やっぱり・・

友人、ゴミ箱をもって揺らす。
中から水の音が聞こえる。

友人　消えちゃった

女　え

友人　いや、まさかね

女　ここじゃなかったね　それともやっぱり埋めてなかったのかな

友人　そうなのかもしれないね

女　また、日を改めますか

友人　いいの　さっき最後、って

女　今日はね、今日はもう終わりってこと

友人　わかった　また明るくなったら

女　うん、じゃあまた

友人、てをふっていなくなる。女、その姿を見送り、１人で舞台上をうろつき始める。
男２、ジョウロを片手にやってくる。
水をこぼすように女の足元に注ぎ始める。

女　あっちょっと　やだ、濡れる
男２　あのさ、
女　なに
男２　やっぱいい
女　（起き上がり）眼
男２　え
女　みてくれないよねいつも　言うでしょほら、目は口ほどにモノを言うって
男２　言うけど
女　目はハダカだからね
男２　わかんの、なんか
女　え
男２　なんかわかんの、
女　わかるよ
男２　じゃあ、
女　もういっかい
男２　え
女　もういっかいだけ

男２　なに
女　ううん　・・・あのさ、育つかな
男２　え
女　これ
男２　あぁ・・育つんじゃないの
女　いつ
男２　さあ
女　お水の量多すぎないよね
男２　少ないぐらいじゃないか
女　うそ　少ないかな
男２　うん

女、男２からジョウロを受け取り静かに水を注ぐ。

女　待てど暮らせど芽は出なかった。

ベッドの上にうつぶせで寝る女。

その無防備な尻を、無遠慮につかむ男１。
シーツがバタバタしている。

女と男の絡み合った足が、ときどき痙攣したり、ピンとのびたり、脱力したり・・を繰り返す様子が見える。女の下着が、片方の足にもどかしくからみついている。男２がそれを見ている。

女、再び横たわっている。
男２、女のポケットをまさぐり、携帯電話をとりだす。
携帯の光が男の顔を照らす。
男２、無言で女の体を携帯で照らし出す。

女　なにやってるの
男２　ああ、起しちゃった
女　別に
男２　立てないの
女　だいじょうぶ

男２、無言で台所に立ち、コップに水を入れて持ってくる。
女、それをみている。

男２　のむ？
女　え
男２　のんどけば
女　いらない、

女、カバンからペットボトルの水を取り出し、飲み始める。

女　おやすみ

女、行ってしまう。

男２　もう２時か

男２、ゴミ箱にコップの水をゆっくりと流す。去る。

友人と連れ添ってやってくる女。

友人　やだなあ、何でも話してよ
　そうそう、この間の　お昼だったかな　あの店にいなかった
女　いつ
友人　あの、確か土・・いや日曜かな
女　先週の
友人　そう先週
女　先週か

友人　いたよね　あたし通りかかったの気づかなかった
女　いや、まったく
友人　いや別にきにしないでほしいんだけど　なんかほら、あたしも気まずかったし
　誰か待ってるのかな、とか思って
女　誰か
友人　そうそう、だから話しかけたら悪いかなって
女　そうみえたんだね

友人　え
女　なんでもない　気になる？
友人　ううん　そういうんじゃなくて
　誰待ってるのかなーって
女　私もよく知らない人だよ
友人　え

女　なわけないでしょ
友人　そうだよね

女　うん
友人　私も知らない人だった
女　え

友人　あのさ　続いてるの
女　なんの話

友人　ううんなんでもない

突如、腹の底から絞り出されるような赤ん坊の泣き声。
次第にそれは、押し殺したような女の喘ぎ声へと移り変わっていく。
２つは重なり、１つの渦のようになって空間を支配する。

友人　あ　なんかなきだしちゃったみたい

友人、ハケる。

女　今日の名前は何にしよう
こないだはなんて呼ばれてたっけ
また作り変えて　新しい名前をつける

友人、子供をあやしながら登場。

友人　ごめんね　よしよし（子供を抱いている）

女　サバ読んでも　バレない
でも肌はウソをつけない

友人　ほらさわってみて　赤ちゃんのかかとってこんなにやわらかいの

女　私は昔　かなり小さいときに家の前のドブさらいをしたことを唐突に思いだした
泥が指の間からにゅっと出てくる　手がどんどん侵食されていく
しゃがんだ隙間から風がスースーと太ももを冷やしていった
そう
泥をかきわけて何か探してた
そうやって、だんだん手を動かすことがただ楽しくなって

友人　やだ　こんなによだれ垂らして

女　ああ　私は手をただ動かす　指の先に何かあたったような気がした

友人　はい、ほらおてて　ひろげて　いち、にぃ、さん、（指を折って数える）

男2がいつの間にか立っている。

男2　最近帰り遅いな
女　最近にはじまったことじゃないと思うけど
男2　そうか
女　今週はいないよ、ずっと
男2　おまえ、自分の身体わかってるのか、
女　なにその話
男2　この話しちゃいけないのか
女　そんなこと言ってないじゃない
男2　いつも話そうとするとお前はいない
女　話そうとなんてしてない癖に
男2　そうやってお前が逃げてるからだ
女　どっちだか、逃げてるのは
男2　ああ、もうやめよう　ばかげてる
女　・・やめようか
男2　やめるって　お前俺はそういう意味で
女　おろしちゃおうか
男2　そんな簡単にいくわけないだろ
女　簡単でしょ　決めるのは
男2　そりゃ口にするのは簡単だ
女　ねえだって想像できる　私と家族になってるところ
男2　いや、それはさ　なんだ、そのほら
女　なんとかなる、って？
男2　まあ、だってわからんだろうそれは　先のことは
女　せめてなんとかする、って言ってよ

沈黙。

男2　つらいのはお前なんじゃないか

女　まあ私の身体だもんね

男２　産むだけは産めばいいじゃないか

女　そしたら粗末にならないって？
子供はどんどん大きくなる　手に負えなくなる
ああもう疲れた耐えられない　はいさよなら

男２　そうやってやさしい誰かに押し付けるんですか　その子
女　どうしてそう
男２　やっぱり無理よ
女　え
男２　だってまさか、あなただってできると思ってなかったでしょ

女　思ってたらこんなに悩まない

男２　私が悪うございましたね

女　なんで

男２　宿してしまった側の問題かと

女　本気で言ってんのかそれ

男２　間。

女　あなた私と一緒になる気あるの
男２　それって
女　考えたこともなかったんじゃない
男２　いや、そんなことは

女　十分、考えられたことなのにね
男２　え
女　もしかしたらできちゃうこととか
男２　そりゃそれくらい考えてた
女　考えてただけでしょ

男２　それじゃだめなのか
女　だめとかそういう問題じゃない
男２　・・お前はどうなんだ

女　もう嫌

男２、静かに去る。
男１が登場する。

男１　先月さ
女　ん
男１　何人だった
女　え
男１　その、何人と
女　４人だよ　あなた抜きで
男１　そう
女　うん
男１　よく憶えてるね
女。　まあ、それは　だって先月だよ

男１　そっか　俺さ、ビョーキになったわ
女　なに
男１　だからビョーキ
女　それって、え

男１、女をじっと見つめる。

女　わたしなの
男１　いや、わからないけど
女　うそ
男１　まさか、ね
女　きいていい
男１　どうぞ
女　あなたは思い当たる
男１　いや

女　そう
男１　というか、憶えてないから、誰とか
女　ああ・・じゃ、わからないね
男１　うん　それに覚えてたところで　わからないって
女　まあそうか　ビョーキか見ただけじゃわからないしね
男１　うん　本人も気づいてないかもだし

間。

女　わたしかな
男１　どうだろう
女　でもだって　ちゃんとゴムつけてたはず
男１　ほんとに
女　たぶん

男１　カレシは
女　え
男１　いるんだろ、カレシ
女　どうして
男１　やっぱり　いやカンだよカン

女　なにそれ
男１　なんか人のものって感じがしてさ
女　別にあのひとのものじゃない
男１　それは結婚はしてないてこと

女　・・そうだけど

男１　そんな顔するなよ
女　あなたがそうやって
男１　カレシかもよってことを言いたかっただけ

女　え
男１　だから、ビョーキ
女　まさか
男１　向こうは浮気してないっていえんの

女　それは
男１　考えたこともなかった？
女　まあ

男１　愛されてるねえ
女　そういうわけじゃない

間。

男１　会うのやめよう

女　なに急に
男１　いや、だって俺ビョーキじゃん？

女　そうだね

男１　楽しかったよ　でももういいかな
女　え

男１　別にさ、お前じゃなくてもいいんだよ
女　なに、急に

男１　だからさ、もう
女　ん？
男１　いやだから、
女　それはさ、どうして

男１　だから、お前じゃなくても良いんだよ　あんただってそうじゃないの

女　それはそうだよ　私だって別に
男１　じゃ、いいじゃん　さよならで

女　待ってよ
男１　なに
女　ほんとにそれだけなの

男１　そうだよ
なにが不満なんだよ　あんたさ、不満に思うほど俺のこと知らないだろ
ていうか　この際言うけど、この名前も本名じゃないし
何も知らないだろ
女　　そんなこと
男１　なんだっていうんだよ
女　どうせ全部消しちゃうんでしょ
私と会ったことも名前はもとより聞かない。何もしゃべらない、
男１　だってとっておいてもしょうがない
それは自分の都合だろ
え
俺の意思は？
なにそれ
だってあなた、どうせ私とこの先どうかなろうなんて思ってないでしょ
そんなこと考えてたの
いや、これから連絡はとらないかもしれないけど
じゃあいいじゃない
わからない
あなたがどうしたいのか
わかってるつもりになってたんじゃないの
だってさ、そういう目的であったんじゃないの
同じ気持ちだと思ってた
２人、コンタクトインプロを行いはじめる。
やりながらしゃべるか、セリフだけ音響で流す）

男１　例えばさ、

女　え

男１　例えば、俺があんたとすごく仲良くなる

で、もう俺しかいないとか、俺に未来を託そうとする

するとどうだろう、俺は

女　だいじょぶだいじょぶ、私　あなたに人生かけるつもりありませんし

男１　例えばの話だよ

女　例えば、とか　もしもなんてもうたくさん

男１　じゃあなに

女　明日の話をして

男１　明日

女　そう、明日なにをするか

男１　まず寝るかな、明日になる前に

女　それで

男１　食事をする

女　誰と

男１　ひとりで、もちろん　朝は人と会いたくない

女　昼は

男１　昼は誰か探しているのかもしれない　もしかしたら

女　夜になって

男１　誰かが隣にいる日もあれば　いない日もある

女　・・・今日はいる日だってこと

男１　そうだね

ゆるやかに暗転する。

女座り込み、地面の一点をみつめている。

友人がそれを見ている。

友人　なにみてるの

女　カエル

友人　やだ、なにこれ　地面にくっついちゃってない

女　うん

友人　ひかれたのかね

女　たぶん・・最初なんだかわからなかったよ

友人　ああ・・これ結構大きいね

友人　まあでも、すぐ片付くか、

女　なんで

友人　こういうのってほっとくとなくなるじゃん
だいたいなくなってない、いつの間にか

女　ああ・・そうだったかもしれない

友人　でしょ？食べられちゃうのかなあ

女　え

友人　いやカエル　跡形もなく

女　あるのかな

友人　だって気づいたときにはもうないし
不思議だけどね　こんなくっついちゃってるのに

女　そうだね

友人　早く会ってあげて

女　え

友人　一人でも家族だから

女　・・・・。
友人　早く会ってあげて

その言葉に誘導されるかのように下手に頭を向け、床に寝そべる女。
下半身がシーツで覆われる。
男2が現れる。

女の股の間から伸びているひもを、男2がゆっくりとひっぱっていく。

男2　深呼吸してください

女　はい

男2　大丈夫ですか

女　はい　なんとか

男2　痛くないですから　大丈夫です

女　ええ・・

男2、ひっぱった紐をてにしていたハサミで切る。

女　あ

男2　お疲れさまでした

女、気を失う。
男2はいなくなり、男1がそばにいる。
女、目を覚まして起き上がる。
男1、女の腹に耳をあてている。

女　なにかきこえる
男　ん
女　きこえた？
男　・・・

女　しーっ

女　ふーぅ・・・（深呼吸する）

顔を見合わせる２人。

女　ど？

男　ぴちゃん、ぴちゃんっって

女　そっか

男　かささささなきゃだ

女　え

男　だって、こんなに降ってるから

女　そっか

男　うん、でないと濡れるよ

女　そうだね

２人より少し離れた場所にいる友人。

友人　この子　なかなかおっぱい飲んでくれなくて

ミルクと混合にしてるんだけど、最近はそっちばっかり

ミルクの方がおいしいのかな　きっとそうだよね

でもこの水　変なにおいする

男１、空のペットボトルの口を、女の胸（乳首のあたり）と、股間に当てる。

それをゆっくりと飲み下す男。

男　おいしい

女、ただそれを受け入れている。男、何も言わずに立ち去る。

女　（友人に）薄めてあげたら

友人　え

女　水は命なんだよ

友人　うん

女　それうすめてあげたら　よくさましてあげて

友人　うん

規則的に聞こえるハサミの音。

女　なんにもいわないんだね

男２　え

女　ううん

男２　なんで急に

女　邪魔だし

男２　じゃま？

女　そうそう

男２　あぁ・・

ジャキン。と大きく着る音。

男２　きりすぎじゃないか

女　そうかな

男２　せっかくそこまでのばしたんだろ　もったいない

女　いまは短いのがすき

男２　うん　のびたね確かに

女　え

男２　のびたのびた

女　すぐまたのびてくるから

男２　でも・・
女　うっとおしいでしょ
男２　そうだろうね

女、窓を開ける。

女　ああ　ひどいにおい
男２　あけるなよ窓

女　ごめん　今日は特にひどいね
男２　最近ひどい

女　私のせいじゃないから
男２　わかってるよ　どっかいくのか
女　そのつもりだった

男２　外みろよ　こんな雨なのに
女　ああ

男２　これ、手紙
女　え
男２　お前にきてた
女　そう

女はていねいに封を開く。少し色あせたその手紙に目を落とす。

男２　誰から
女　・・・
男２　それってさ、
女　（さえぎるように手紙を読み始める）
「お元気ですか。私は元気です。
今、幸せですか。あなたの隣、周りには誰がいますか。
きっと見たことも聞いたこともない人がいるんじゃないかって思います。
では、まだみぬ人とお幸せに」

男２　これお前が書いたのか　自分で

女　そうだね
男２　本当かよ
女　え
男２　いや、差出人がお前の名前だったから　まさかとは思ったけど
女　そのまさか

男２　ちょっと想像つかないな
女　でしょ　でもみんな書かされたから
男２　ああ

沈黙。

女　ほんとはね、友達に宛てようかと思ったんだけど
ほらでもさ、１０年後だよ。
１０年とか続く自信ないっていうか、
ほんとの他人になっててもあれだし、
男２　だから自分に
女　そうだね

男２　まだみぬ人か、
女　ごめんね
男２　謝るなよ
女　・・
男２　なあ俺たち、ほんとにここで「生活」してたのか？
どうなんだよ、なあ

ひっくり返るゴミ箱。

女　一応生活してたんじゃないですか
何も不便なんてなかったでしょ

男２　なんで捨てなかったこれ
女　あなたに頼んだじゃない　捨てといてって
男２　これほっとくとどうなるかわかるだろ
お前が言ってたんじゃないか

女　何もしない癖に　えらそうに
男２　知らなかったかもしれないけど　俺は綺麗にしてた
お前はそれ　当り前だと思ってたかも知れんが
何もしてなくても埃なんか
女　私へのあてつけ

男２　お前があまりにも何もわかってないからだ
捨てた後のことを考えろ
女　きたない　掃除だけはさ　しっかりしようよ
男２　ああ

女　私は別にかまわないよ、でもね、人の家って汚くみえるものじゃない
ちょっとした汚れとかでも、違う
男２　そうかもな

女　私　そこやるから
男２　わかった

部屋の片づけをしていく２人。
女、排水溝のつまりをとっている。
ゴム手袋越しに何か発見する。

女　あれ、これなんだろ
男２　ああそれ、種じゃないか
女　なんの
男２　あのときのほら・・桃かな
女　桃
男２　俺が腐らせちゃった
女　ああ・・

男２　なんでいまさら
女　ね

２人、笑い合う。

男2　じゃ、さよなら
女　うん

男2、いなくなる。
友人が家に来る。

友人　どうしたのこれ
女　え
友人　もの増えたんじゃない　ずいぶん
女　ああ・・ごめんね
友人　いや、ごめんねじゃなくてね・・何かあったの
女　別に何も　ああごめん　そこらへんどっか座っててくれる

友人、立ちつくしている。

友人　手伝おうか少し
女　いいかいいから　座ってて
友人　あのさ
女　え　ああそっかごめん座れないかなそこじゃ　じゃちょっと待って今
友人　あのさ、
女　え
友人　ずいぶんモノ増えたね
女　そうかな　ついね
友人　これ、雑誌とかちゃんと全部読んだの
女　それ勝手に届くの　毎月
友人　解約しちゃえば
女　ああ

友人　いらないものばっかり持ってるんじゃないの

女　それはさ、だって

友人　変わらないね　ほんとに

女　なんの話

友人　いや、私だってもう言い飽きた　あんたも聞きあきたかもしれないね
もうあたしは止めない
でもね、いつになったら片づくの？
こんなにして
どうすんのいったい

女　・・・

友人　欲張り

女　選べないんだよ

友人　私　もう行くね　しばらくあえなくなるけど　元気で

女　ああ、

友人　なんでも話して欲しかった

女　あんただから話せないんだよ

部屋の中で一人佇む女。部屋を見渡して、

女

・・ミドリ・チカコ・高橋さん・シゲル。アキヒト・れいちゃん・カズヤ・ユミ・
のぶくん、マサミ、・・・カズヤ・ユミ、みどり、加藤さん、みか、
笹中、ともちゃん、・・・ともちゃ・・とも

おーい

おーい

声　おーい

女　おーい

1人の男、現れる。

男　はい

女　あ

女　え

男　呼びました

女　ええ、ええまあ

男　私じゃなかったですか

女　いいえ

男　じゃあ

女　あなたではなくないけれど

男　お呼びでない？

女　あなたでいいです

男　はあ

女　あの

男　え

女　あなた

男　え

女　このこ、まだ名前が無いんですよ

男　ああ、そうか

女　何にします

男　ああ・・お前が決めてくれ

女　え

男　いやだから・・何でも

女　わかりました

「何でも」ちゃ・・あ、男ですか女ですか

男　え

女　どっちなの

男　男じゃないかな
女　そう、じゃあ「何でも」くんね

子供をあやし始める

女　あなたも抱いてあげて
男　え
女　ふふ、お父さんよ、「何でも」くん
男　どうも、はじめまして

女　よろしくお願いします
男　こちらこそ、

寄り添い合う3人の家族の絵が光に包まれる。

終